平成13年３月13日第三種郵便物許可　2006年１月25日発行　年４回（１、４、７、10月の25日発行）

Vol.15 / No.4

平成18年度野球殿堂入り決定　　事務局長　小林二三男

野球殿堂は、日本の野球界の発展に大きな貢献をした方々の功績を讃え、顕彰するために昭和34年に創設されました。

左から　豊田泰光氏、脇村春夫氏、川島廣守氏、上田利治氏、山田久志氏、杉下 茂氏、高木守道氏、金田正一氏、門田博光氏

１月５日㈭に第46回競技者表彰委員会の投票を開票、６日㈮には第45回特別表彰委員会を開催し、平成18年度の野球殿堂入りを決定致しました。

競技者表彰委員会から元南海ホークスの門田博光氏、元中日ドラゴンズの高木守道氏、元阪急ブレーブスの山田久志氏が選出され、特別表彰委員会からは前コミッショナーの川島廣守氏と元西鉄ライオンズの豊田泰光氏が選出されました。

記者発表は１月10日㈫　午後３時より博物館の殿堂ホールにおいて行われ、顕彰者に殿堂入りの伝達があり通知書が授与されました。

殿堂入りされた方々のスピーチを紹介します。

門田氏「諸先輩がたくさんおられる中で、私が先に選ばれたということで感激しております。最高の賞を頂いたと思って舞い上がっております。」

高木氏「先達のご苦労で今日があるということを改めて感じて、心より感謝しています。身に余る光栄、感激一杯でございます。今後も野球界の為、精一杯努力して参りたいと思います。」

山田氏「私がここまでくるには、たくさんの人との出会いがあって、その人達に支えられてきたと思っています。今後は逆に支える立場で一層努力してゆきたい。」

川島氏「セ･リーグ会長14年、コミッショナー６年の20年の長きに亘り、たくさんの皆様のお力添えでこの上ない栄誉を頂いて感謝しております。」

豊田氏「西鉄ライオンズから殿堂入りしたのは私で６人になります。大変良いところ（球団）にいたと思います。特別表彰で野球を辞めてからの評論活動が認められたのなら、最高に幸せだなと思います。」

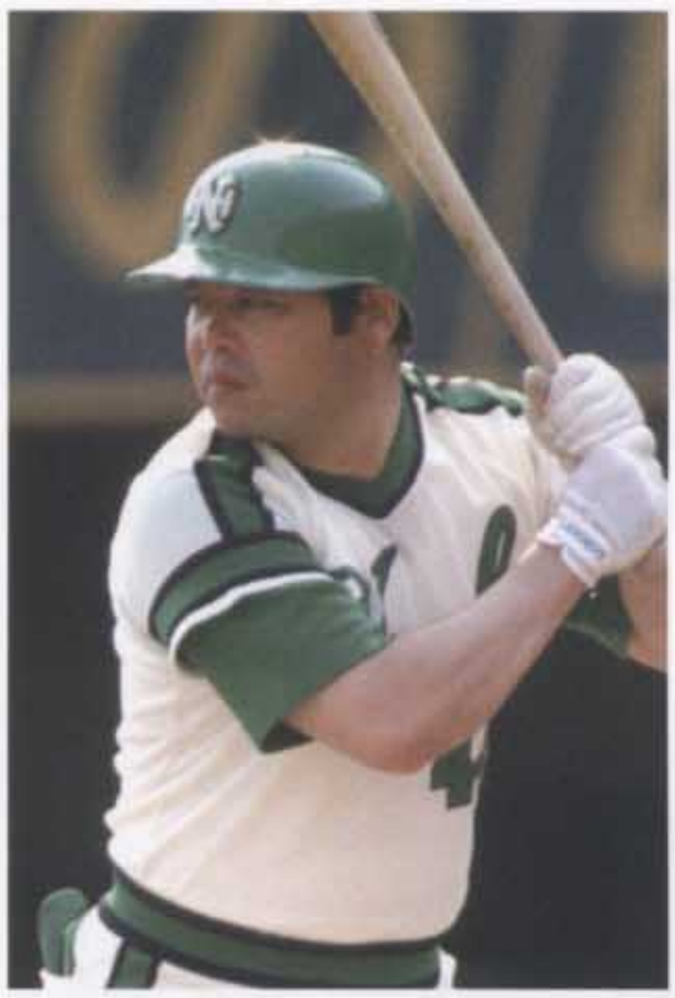
門田氏には殿堂入り大先輩の金田正一氏、高木氏には元中日監督の杉下 茂氏、山田氏には元阪急監督の上田利治氏、川島氏には互いに協力してプロ･アマの雪解けを加速させた高校野球連盟会長の脇村春夫氏、豊田氏には特別表彰委員会を代表して田村大五氏がそれぞれゲストスピーカーとして温かいお祝いの言葉や愉しいエピソードなどを語り、非常に和やかな発表の場となりました。

後列左から　豊蔵 一常務理事、根來泰周理事長、小池唯夫常務理事
前列左から　豊田泰光氏、川島廣守氏、山田久志氏、高木守道氏、門田博光氏

（表彰式は、７月21日㈮　神宮球場でのオールスター第１戦で行います。）

競技者表彰委員会

第46回競技者表彰委員会は、40歳で本塁打と打点の二冠王に輝いた門田博光氏(57)、2274安打を放ち走攻守そろった名二塁手といわれた高木守道氏(64)、サブマリン投法で284勝を挙げた山田久志氏(57)を選出した。



門田博光氏
(写真提供・ベースボール・マガジン社)

記者発表に臨んだ門田氏の目に涙が浮かんでいた。「今までの表彰式と違って、感激しています。体調は悪いですが、気持ち的には舞い上がっていいのかな」。足をひきずりながら、あいさつに立った。持病の糖尿病が悪化。さらに昨年末には脳梗塞(こうそく)で倒れ、入院した。それでも、殿堂入りを聞いて、自宅から駆けつけた。

現役時代も決して順風満帆だったわけではない。79年にはアキレスケンを断裂しながら、厳しいリハビリに耐え復活した。40歳で44本塁打、125打点の二冠王に輝き、史上最年長のMVPに輝いた。通算567本塁打は史上3位だ。そんなタフネス男だっただけに、周囲は指導者としての「復活」を期待する。「まず健康な体に戻さないとね。今の選手には技術力へのこだわりが必要かな」。久々にかつてのライバルや関係者と顔をあわせたこともあって、野球への熱い思いが口をついた。

現役時代は口数少なくプレーに専念した高木氏も、この日は時折笑顔を見せ、ユニホーム時代を振り返った。「派手な長嶋(茂雄)さんのような人に対抗するのには、淡々と、さりげなくやるしかない。まあ僕は愛想もよくないし、技でみせるのがファンサービスだった」。バックトスはその1つだった。公式戦で初披露したときはセーフとなり、当時の水原監督に叱られたという。「そんなプレーはするな」ともいわれたが、決してやめることはなかった。「ミスしなきゃいいんだろ、見ておれ、という気持ちだったね」。負けん気の強さも、174cmの高木を名二塁手に育て上げた原動力だったのかもしれない。

高木守道氏
(写真提供・ベースボール・マガジン社)

負けん気でいえば、山田氏もかなりのものだった。下手から繰り出す快速球は150キロ近いもの。そのスピードボールを武器に、真っ向投げ込んだ。「鼻っ柱だけで投げていた。打者との勝負だけに燃えていた。でも、あの1球が山田を変えた」と自ら話した。プロ3年目、71年の日本シリーズ第3戦だった。1−0とリードし9回2死までこぎつけた。あと1人。ここで王に逆転3ランを浴び、目前の勝利は吹っ飛んだ。

山田久志氏
(写真提供・ベースボール・マガジン社)

「大きな代償を払ったけど、プロの厳しさを教えてくれた1球だった」。17年連続2ケタ勝利、12年連続開幕投手、76年から史上初の3年連続MVP…。山田氏の持つ数々の記録は、このとき思い知らされた「1球の怖さ」が生み出した。

競技者表彰委員会は、現役を引退して5年を経過している競技者(選手、コーチ、監督、審判員)を有資格者とし、野球報道に関して15年以上の経験を持つ委員の投票(10名連記)で選出する。3分の2以上の有効投票があれば、その7割5分以上の得票者を野球殿堂入りとする。今年の委員数は298人。有効投票が290で、当選必要数は218だった。幹事会が選出した候補32人の中、門田氏は238票、高木氏は230票、山田氏は223票を集めての殿堂入りだった。

(競技者表彰委員会代表幹事　米谷輝昭)

特別表彰委員会

1月6日、東京ドームホテルで行われた平成18年度第45回特別表彰委員会で、前プロ野球コミッショナー・川島廣守、元西鉄ライオンズ遊撃手で現野球解説者・豊田泰光両氏の殿堂入りが決定した。

前年までの候補者名簿から、平成17年度殿堂入りの志村正順氏と過去数年得票が少なかった天保義夫氏、岡本伊三美氏、川瀬 進氏の4氏を削除、新たに戦前の甲子園大会で準決勝、決勝をともにノーヒット・ノーラン記録で海草中を優勝に導いた速球投手・嶋清一投手（戦死）と競技者表彰委員会から異動した元中日ドラゴンズ・谷沢健一氏、元ロッテ・オリオンズ・有藤道世氏、元阪神タイガース・掛布雅之氏の4氏を加え、出席13委員の記名投票の結果、川島、豊田両氏がともに当選必要数（10票）を越える12票を得て殿堂入りが決まったもの。初めて候補者に入った嶋氏は9票で惜しくも殿堂入りを果せなかった。

川島氏は1922年（大正11年）2月27日生まれ。福島県出身。中央大卒業後、警察庁警備局長、内閣調査室長、田中内閣官房副長官、鉄建公団総裁などを経て、84年から第4代セ・リーグ会長、98年から第10代コミッショナーに就任、セ・リーグ会長を14年間、コミッショナーを2期6年間、計20年間にもわたりプロ野球界を引っ張ってきた。

セ・リーグ会長時代から日米野球協定の見直しに着手、みずから渡米して大リーグ幹部を歴訪、日米球界の連絡強化に貢献し、コミッショナー時代に米大リーグ開幕戦の日本での開催（2000年3月）を実現させた。

川島廣守氏

また、早くから断絶時代が続いていたプロ・アマ間の協調体制確立を謳いあげ、現役プロ野球選手と高校野球選手のシンポジウム「夢の向こうに」の開催にも尽力、2004年には高野連と「新人選手選択に関する覚書」に調印、プロ・アマの雪解けを加速させ、発表の席にゲストとして出席した脇村・高野連会長は「プロ側の川島さんの決断があって、いま（のプロ・アマ間の雪解け）がある」と川島氏の功績を讃えた。

豊田氏は1935年2月12日生まれ。茨城県出身。水戸商業から53年、西鉄ライオンズ入り、1年目からレギュラー遊撃手として活躍、打率.281、27本塁打の成績でパ・リーグ新人王。27本塁打は、86年西武・清原和博に破られるまで高卒ルーキーの最多本塁打記録だった。

56年、打率.325でパ・リーグ首位打者。同年の対巨人の日本シリーズでも首位打者になり最優秀選手。同年から3年連続、巨人を破って日本一の座についた西鉄ライオンズ黄金時代の打線の中核として猛打をふるった。63年、国鉄スワローズ（65年からサンケイ、69年・アトムズ。現・東京ヤクルト）に移籍、68年には2試合連続代打サヨナラ本塁打の記録を作るなど「勝負強い打者」として人気を集めた。72年に近鉄コーチをつとめたあと野球評論にうちこみ、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌など多方面で独特の辛口批評で“豊田ブシ”のファンも多い。

豊田泰光氏
（写真提供・ベースボール・マガジン社）

一時代を謳歌した西鉄ライオンズ出身者では三原脩、大下 弘、仰木 彬（いずれも故人）、中西 太、稲尾和久に次ぐ6人目の殿堂入りだが、競技者表彰でなく特別表彰だったことで「選手としては大したことではなかったのかな」と報道陣を笑わせながらも「むしろ評論活動が認められたということなら光栄の至り」と喜びをかみしめていた。

（特別表彰委員会委員　　田村大五）

コラム／博覧・博楽 (17)

アメリカ野球殿堂の楽しさ・完

松原　明（野球体育博物館維持会員）

アメリカ各地を回って、しみじみ感じたのは、どの博物館、殿堂も、青少年の教育の場を意識した構成になっていることだ。

例えば、オクラホマ州ガスリー市にある「オクラホマ・スポーツ博物館」は、毎週、地元の子供を集めて、この地にゆかりのある、レジェンドが交代で集まり、野球の話しをして聞かせる。場内中央には、円形の広場がある。そこは、ビデオを上映する劇場になっている。「ここでは、青少年を酒、タバコの害から守るために、呼びかけています」という。

オレゴン州・ポートランドの「オレゴン・スポーツ殿堂」は、「子供たちにスポーツを楽しみながら、その精神を学んでもらう工夫をしている」目的がある。市内の目抜き通りの便利な場所につどう親子連れの姿は多い。

ジョージア州メイコン市の「スポーツ殿堂」は実に立派な建物だが、その目的は「州の高校生のための教育施設」と、はっきり定めてある。展示物は、すべて、郷里の偉人たちの足跡をたどりながら、「キミたちには、もっと広い未来がある」と、訴えているのが良く分かる。

カリフォルニア州サンディゴのバルボア・パークにある「ホール・オブ・チャンピオンズ」は、ここを訪ねる青少年のために、教育的体験ゾーンを設け、専任の係員が、親切に指導し、展示品から、何を学び取るか、の手ほどきをする。広大な公園には、動物園、美術館が多数点在し、バルボア・パークはまさに、天国のおもむきがある。

ニューイングランド・スポーツ殿堂は、ボストンの地下鉄ノース・ステーション駅から5分のフリート・センター内部にある。ここは、NBAセルチックスと、NHLブルインズのホーム・コート。巨大なアレーナの5、6階のコンコース壁面を使って、地元の3大プロスポーツの展示をしている。試合観戦の合間に自由に、先人の偉業の跡を観賞して下さい、という多彩な展示。テッド・ウィリアムス外野手の等身大蝋人形にも、対面できる。

ニュージャージー州メドウランド・コンプレックスにある「コンチネンタル・アレーナ」1階のチケット売り場壁面にも、同州に関係ある、スポーツマンを飾ってある。

もうひとつの楽しみは、殿堂広場、球場、博物館にある銅像の観賞。ジャイアンツのSBCパーク公園にある、湾に突き出した形のマッコビー像は、朝日、夕日を浴びて輝くユニホーム姿がいい。

オクラホマ市のブリックタウン球場正面にはミッキー・マントル、ジョニー・ベンチ像。ともに、豪快なフォームにはほれぼれする。

リプケン博物館前のリプケン立像は、右手を差しのべて語りかける、親しみのある姿だ。

私が一番気に入ったのは、オリオールズのホーム、カムデン・ヤードの出口にある、ベーブ・ルース少年の像。右手にグラブ、左手にバット。まだ、少年時代の表情に、天下を目指すルースの意志をくみ取れる。オリオールズの展示は、この門を入るとすぐに分かる。ボルチモアには「レジェンド博物館」も2005年にオープン。何時間いてもあきない、楽しい場所だった。

1963年殿堂入り
中島治康氏レリーフ

殿堂入りの人々を語る(10)

父の思い出

中島　治彦（中島治康氏 長男）

「プロ野球三冠王第１号」――これが父の授かった称号です。記録したのは、昭和13年秋のシーズン。ただし、日の目を見たのは27年を経った昭和40年でした。当時、南海ホークスの野村克也氏がシーズンを通して初の三冠王の快挙を達成したのです。これがきっかけとなって、それまで埋もれていた父の記録にスポットライトがあてられました。本人はもとより私達家族にとっても、降って沸いたような「昔の名前」の浮上でした。ちなみに父の本塁打数は10本（38試合）、野村氏は42本（136試合）でした。その時の父は、今更といった感じでさらりと受け止めていたように記憶しています。自分の記録は遠い戦前のこと、試合数も１シーズンと２シーズンという大きな差があったこと、なにより偉ぶること、奢ることをよしとしない生きざまが「自分のことは、そんなに騒いでくれるなよ」という思いになったのではないでしょうか。殿堂入りが決まったときも、家で家族に少しの親戚を交え食事をともにしただけでした。

父のユニホーム姿は見たことがありません。私が生まれたのは、昭和22年の２月です。父は巨人軍の監督として姫路で春季キャンプを指揮していました。その後、監督兼選手として新興チームの大洋（現・横浜）から要請され移籍しましたが、２年後の昭和26年にはプロ野球を引退しました。私が４歳のときです。そのころ、父は私のために自分の背番号だった「３」を縫いこんだユニホームを作ってくれました。

父がユニホームを脱いだ経緯については、一周忌に伺った話が忘れられません。話しをしてくれたのは、父のチームメイトで、当時巨人の合宿所寮長をされていた武宮さんです。同氏は竹刀を片手に、合宿住まいの若手選手を厳しくしつけたことで知られる人です。武宮さんは、しんみりとした口調でこう語ってくれました。「お前のおやじがプロを辞めたのは、お前が生まれたからなんだよ。早く野球から身を引いて、家で一緒に過ごしてやりたいと、よく言っていたんだ。」戦後間もなくのプロ野球は、地方ゲームも多く、遠征に出ると一ヶ月位は家を空けるのが当たり前であったらしい。父は40歳近くになって生まれた私のこともあって、家庭を第一に優先する道を選んだということだったのです。

新しい仕事は、読売新聞社の運動部で東京六大学と甲子園の高校野球を論評するものでした。小学生のころの思い出は、日曜日になると父に連れられて通った神宮球場の六大学野球です。父の仕事場である記者席の端に座って観戦しました。球場はいつも満員で、大盛況。私は心ときめく思いで選手たちのプレーに声援を送ったものでした。今でも、長嶋さんだけでなく立大の杉浦、本屋敷、早大の宮崎、北崎、慶大の衆樹さんらの名前がスラスラと口をついて出てくるのです。懐かしい思い出です。

仕事の上では、プロ野球と距離をおいていましたが、巨人の試合はテレビ中継で欠かさず見ていました。下手くそなプレーが飛び出すと口癖の「バカヤロー」を連発するのが常でした。

祖父は父を教師にさせたかったと聞いています。父もその気でいたようで、現に松本師範学校に入学したのです。しかし、子供のころから続けた野球の夢が断ち切れず３年生になるときに松本商業（現・松商学園）に編入学、夏の甲子園で優勝投手になりました。プロを引退してからは、毎年夏になると松本通いをしました。県大会を前にした母校の後輩達を励まし、守備練習のノックバットを振ったのです。

昭和60年、２回目の脳血栓で身体が不自由になってからも、野球への思い込みは少しも衰えることはありませんでした。とくに高校野球、大学野球、母校の松商と早大の戦いぶりには一喜一憂する毎日でした。「幸せな野球人・中島治康」だったと思います。

知ってほしいこんな資料（54）

「1934年 日米野球 大隈侯邸園遊会の写真」

連載の第35回で、鈴木惣太郎氏より寄贈された写真の中から、ラジオ放送中の二出川延明氏、沢村栄治氏、鈴木氏の３ショットの写真をご紹介しましたが、今回も同じく鈴木氏より寄贈された１枚をご紹介します。

1934（昭和９）年11月２日、横浜に来航し汽車で東京入りをしたベーブ・ルースら大リーグ選抜一行は、翌３日に大隈信常侯（早大名誉総長、36年より日本職業野球連盟初代総裁）の邸宅で開催された園遊会に出席します。この園遊会には、一行をはじめ全日本の市岡忠男、浅沼誉夫両監督はじめ選手、関係者も出席し、華やかに行われた様子が４日付の読売新聞夕刊で報じられています。この写真はこの際に、大隈邸をバックに日米両軍の選手、関係者が入り混じって写されたもので、皆さん本当に楽しそうに打ち解けている様子がうかがえます。写真には、詰襟の学生服に坊主頭の沢村栄治氏（当時17歳）の姿も見えます。

1934年11月3日 大隈侯邸園遊会

沢村栄治氏
（手前は水原 茂氏）

早稲田大学大学史資料センターに問い合わせたところ、この建物は清水建設が当時の赤坂区青山南町に建てた建物との情報をいただきました。当時の地図によると、南青山６丁目の根津美術館の西側一帯が大隈邸の敷地だったようです。

学芸員　関口　貴広

こんにちは図書室です

今回は社会人野球の部史や連盟史などを表にしました。この他にも日本野球連盟が毎年発行している連盟報や社会人野球総合情報誌『グランド・スラム』（創刊号から）、新聞スクラップなど、社会人野球に関する本・雑誌を所蔵しておりますので、ぜひご利用下さい。

書　　名	発行年
黒獅子旗に賭けた男たち　NTT東京硬式野球部三十五年史	1989
熊谷組野球部史”燃えよ火の玉”	1989
神戸税関野球部六十四年の歩み	1982
国鉄野球史	1981
新日鐵室蘭野球部のあゆみ　強化三十周年を記念して	1980
白球は鞍山の空高く　昭和製鋼所野球部の回顧と満州の野球界	1980
仙鐵野球二十年史	1941
球道三十年　拓銀野球部闘いの記録	1980
北の若き獅子たち　大昭和製紙野球部史・白老編	1985
東海の暴れん坊　大昭和製紙野球部史・富士編	1985
大連實業團二十年史	1932
電電関東野球部二十五年の歩み	1985
力と希望　日本石油カルテックス野球部史	1981
日鉱日立硬式野球部回顧録	1975
熱闘の軌跡　日本生命野球部史	1986

書　　名	発行年
北海道ノンプロ野球側面史　太洋倶楽部史　上巻	1951
育め伝統　函館太洋倶楽部70年	1978
スコアボードが見ていた。函館太洋倶楽部80年の歩み	1986
満州倶楽部野球史	1969
明治生命硬式野球部･創部40年史	1999
八幡製鉄所野球部史	1937
八幡製鉄野球部史　大正12年～昭和30年	1956
日本野球連盟50年史[1949-1998]	1999
日本社会人野球協会九州連盟野球史	1984
日本野球連盟北海道地区連盟50年史	1999
兵庫県野球連盟70年史	2003
都市対抗野球大会40年史	1969
都市対抗野球大会60年史	1990
社会人野球日本選手権大会10年史	1984
社会人野球日本選手権大会20年史	1994

司書　山根　礼子

【戦没野球人モニュメント】除幕式

アマチュアコーナーに
設置されたモニュメント

除幕式のようす

戦後60年の節目に、戦死したアマチュア野球の選手を慰霊する「戦没野球人」のモニュメント」が完成し、その除幕式が11月7日(月)にプロ野球・アマチュア野球の関係者約30人が出席して、館内殿堂ホールで行われました。

縦102センチ・横171センチのモニュメントには、中等学校は春・夏の甲子園大会、大学は各リーグ戦、社会人は都市対抗に出場し太平洋戦争などで戦死した選手151人の名前が刻まれています。

除幕式後、モニュメントは館内のアマチュアコーナーに設置されました。

左から
(財)日本学生野球協会会長・松前達郎氏
(財)日本野球連盟会長・松田昌士氏
日本プロ野球コミッショナー（当館理事長）・根來泰周氏
(株)東京ドーム代表取締役社長・林 有厚氏

碑文

日中戦争から太平洋戦争と続いた戦火の中
散華された野球人に哀悼の意を表し　ここに慰霊する
戦後六十年という節目の年に当たり
中等学校野球・大学野球・社会人野球を通し
こよなく野球を愛した方々を「戦没野球人」として
ここに永く名を留める事とする

二〇〇五年十一月

社団法人　日本野球機構
財団法人　日本野球連盟
財団法人　日本学生野球協会
財団法人　野球体育博物館

博物館からのお知らせ

【訃　　報】

- 2004年に野球殿堂入りされました仰木 彬氏が12月15日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
- 1999年に野球殿堂入りされました近藤貞雄氏が本年１月２日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
- 1994年～1999年まで当館の主事を務めた馬場長彦氏が12月７日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

12球団ベットマーク入り「かっとばし」発売中！

折れたバットのリサイクル商品「かっとばし」に、新しく「12球団ベットマーク入り」がでました。
従来のロゴマーク入りは黒のみでしたが、今回は12球団の色別のカラフルな箸となっています。
価格は１膳1,365円(税込み)です。
　長さ：23.5cm
　材質：アオダモ（折れたバット）

● 博物館のご案内

場　　所　東京ドーム21ゲート右
開館時間　３月１日～９月30日AM10時～PM６時
　　10月１日～２月末日AM10時～PM５時
　　（入館は閉館の30分前まで）
入 館 料　大　　人　400円（300円）
　　小・中学生　200円（150円）
　　（　　）は20名以上の団体
休 館 日　月曜日（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館）
　　年末年始（12月29日～１月１日）

《２月・３月・４月の休館日》
２月　６日・13日・20日・27日
３月　６日・13日・20日
４月　10日・17日・24日
＊３月21日から４月９日まで無休です。

企画展　『子供の遊びと野球』

会　期　～平成18年２月12日(日)
会　場　野球体育博物館 多目的ホール

昔から、子供たちは野球をスポーツとして楽しむだけでなく、あこがれのスター選手のかるたやメンコで遊んだり、野球のプレーをまねたゲームをしたり、いろいろな形で野球を遊びの中に取り入れてきました。今回の企画展は、ちょっと懐かしい時代の、こうした子供たちの遊びの中にある野球をご紹介しています。展示資料は昭和のものを中心に、双六、かるた、野球盤をはじめ、ベーゴマ、メンコ、ブロマイド、野球カードなどです。また、双六と野球盤の体験コーナーも設置しています。

少年野球双六　1930年頃

●編集後記　今年３月に開催されるワールド・ベースボール・クラシック。アジアラウンド（１次リーグA組）の試合は東京ドームで３月３日、４日、５日に行われ、上位２チームが２次リーグへ進みます。みんなで日本代表チームを応援しましょう!!

Newsletter Vol.15 / No.4
2006年１月25日発行
編集・発行　財団法人　野球体育博物館
〒112－0004　東京都文京区後楽１－３－61
Tel　03（3811）3600　Fax　03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/
定　価　100円

平成13年3月13日第三種郵便物許可　2006年1月25日発行　年4回（1、4、7、10月の25日発行）

Newsletter

THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959

Vol.15 / No.4

リレー随筆(23)

競技者表彰委員会幹事　　井上　明（朝日新聞社）

2005年は日本の野球界に「快速球」が吹き荒れた。

7月、阪神甲子園球場の阪神－横浜戦。横浜のマーク・クルーン投手が、プロ野球では初めてとなる球速160キロの大台を突破する161キロを記録、野球ファンの度肝を抜いた。

それから一ヵ月後、今度は高校野球に話題が移った。夏の第87回選手権大会。大阪桐蔭の左腕・辻内崇伸投手が登場。春日部共栄との1回戦で1球目にいきなり148キロ。徹底した直球勝負を挑み7球目に、スコアボードの球速表示が152キロと記した。

今から20数年前、中日を担当していたナゴヤ球場で150キロの威力を目の当たりにした。

「スピードの申し子」といわれた小松辰雄投手の出現だ。小松投手が登板すると、1球ごとに球場全体にざわめきと期待の声が渦巻いた。夜間照明に浮かび上がるボールの白さ、糸を引いて浮き上がるようにしながらミットに吸い込まれる美しさ。その残像にしばらく見とれたことが忘れられない。

“怪物”と呼ばれた江川卓、松坂大輔投手らをのぞけば、10年ほど前の高校球界では、球速140キロが速球派の代名詞だった。ところが、近年は辻内投手のように、150キロに迫る速球を投げる投手が増え、スピード化に拍車がかかってきた。体格の向上に加え、日頃の筋力トレーニングによるパワーアップ、投球フォームの研究といった成果が球速アップの要因だろう。

とはいえ、日本球界を代表する松坂投手でも、速球だけの単調な投球では打者は抑えられない。野球の難しさでもありピッチングの奥深さ。球威はもちろん、多様な変化球、さらに正確なコントロールの養成と一流投手への要求は限りない。

ピッチングマシンが浸透、以前に比べ数倍といわれる打ち込み量で打撃を磨く打者に対し、投手は生身の体を酷使するしかなく、投げ込むといっても限界がある。腰や肩、ひじなどの故障がつきまとい、投手にとっては厳しい時代が続いている。

そのうえ、今季から二段モーションが厳しく規制される。アマに比べプロの規制が緩やかだった。個性的なフォームを作り上げてきた投手の中には、変更を余儀なくされ、とまどいもあるようだ。腕や足の動きに神経を使うあまり本来の威力を失うのでは、と危惧する声も聞こえるが、野球規則8・01(a)(b)には「打者への投球に関する動作を起こしたならば、中途で止めたり、変更したりしないで…」とあり、これまで容認されていただけ。国際大会も増え、ルールに準ずることが大事。子供たちの手本となる投球フォームを身につけ、これぞプロという力と技がみたい。

ところで、ファンサービスとして定着した感のある球速掲示だが、球場によってばらつきがあり、誤作動が目立つ。明らかに計測ミスと思われる数字が再三表示されるのには閉口する。これでは数字そのものに不信感を抱くファンも多い。もう少し正確な計測が求められる。

今年も最速記録の更新が成るか、興味深い。野球の醍醐味でもある豪速球、投手の“スピード違反”は大歓迎だ。